共に学び合い、共に助け合う学校安全教育の実践～共助に向けて～

◆　所属・提案者（◎代表者）

幸手市立長倉小学校	◎石塚　吉幸

ねらい

本校は、全児童数５１０人の中規模校である。学校周辺の田畑が次々に住宅地と変わる中で、道路が整備されないまま住宅が建ち、見通しが悪く、道路も狭く危険な個所が多い。児童が主体的に交通安全及び生活安全を意識して行動できる基礎を養う必要がある。

そこで、災害図上訓練（ＤＩＧ）を実施し、児童の登校中に大地震が起きたとき、通学班の班長を中心に、子どもたち一人一人がどのように行動すればよいか、主体的に判断できるようすることを目指して取り組んだ。

実践内容

○災害図上訓練（ＤＩＧ）の様子（訓練の詳細は別紙「ＤＩＧ（災害図上訓練）実施計画」参照）

①地区の指導担当の先生が、うまく地図を読み取れていない児童に対して助言しているところ。
どの子もみんな一生懸命に取り組んでいる。(活動場所：教室)

②班員全体で地図を囲んで話し合っている。登校の途中で大地震があったらどうすればよいのか、子ども１１０番の家はどこにあったのかを話し合いながら印をつけたり、色を塗ったりしている。

③給食のときのように児童の机を４個並べて、地図をみんなで囲んで話し合いながら活動を行っている。(活動場所：教室)

④低学年も危険地帯に色を塗る活動を行うことで、通学途中に危険な場所があることがよくわかる。
色塗りをみんなで分担することで、低学年の子にも安全な場所と危険な場所を区別することができるようになる。(活動場所：教室)

⑤椅子が全員分ないときや机が足らないときには、床を使いました。
体育館で活動をしている地区は、必然的に床での活動となります。
（活動場所：教室）

⑥黒板に貼った地図を使って発表をしている。同じ地区の班が他に８班あり、「私たちと同じ所に気づいたね」「そうか、あの場所も避難するには、いいね」といった理解を深めたり、共感したりするよい機会である。
（活動場所：理科室）

実践時期・期間

・６月上旬

実践の成果や課題

○地図上で確認することにより、通学路をはじめ、住んでいる地域の避難可能な場所や危険な場所を確認できた。児童の災害に対する意識の向上が図れた。
○下校時なども学年の子どもたちだけで対応できるようになった。
○登下校中の避難の仕方が明確になったことで、自ら判断し行動しようとする意識が高まった。

セールスポイント

災害は、いつ起こるかわからない。学校に児童がいない登下校中に起きたとき、どのように行動すればよいかを考える良い機会となる。

他校で導入するポイント

○児童に分かりやすい地図を用意しなければならない。自分の家自体が地図から読み取れなくても、通学班の集合場所等が読み取れない地図では実施が困難となる。
○地図については、実施計画者が事前に用意するが、色鉛筆は班で１つ必ず用意しなければならない。

色えんぴつを使った活動

色	使い方
茶色	大きな道路をぬりましょう。
水色	川をぬりましょう。
赤	通学路を線で引きましょう。
みどり	学校や病院など、ひなんできる所をぬりましょう。
オレンジ	きけんな建物をぬりましょう。
青	子ども１１０番の家をぬりましょう。
黄	はん員の家をぬりましょう。

失敗しないための方策

○全校が地区別に分かれての活動となり、通学班の中には１年生～６年生までの異学年集団となる。班長がリーダーシップを発揮し、班員の意見をまとめ話し合いを進めていくことが大切となる。また、地区別の担当教員にも事前に実施方法を理解してもらうための説明が必要となる。
○活動場所は、各教室・理科室・図工室・体育館など学校の規模によって異なるが、使用できる教室はすべて活用した。
○実施後は、保護者にも災害図上訓練の実施について説明することで災害に向けた取組に対する理解と啓発を図る。

こうすればより高い効果が得られる方策など

①集合場所から学校までにある危険な建物や場所を色鉛筆で記入して明確にする。（川・橋・鉄塔・看板・ブロック塀）
②集合場所から学校までにある避難できる施設や建物を色鉛筆で色分けして明確にする。（コンビニ・病院・子ども１１０番の家・公共施設）
③班ごとに作業を行った後、地区内で発表し合うことで、同じ地区の仲間が集まっているため、他の班も共感して聞くことができる。

外部有識者からのコメント

防災や交通安全について、組織として取り組む意識を子どもたちに植え付ける上では、登下校における児童集団である「通学班」は、ある意味最適な集団と思われる。発達段階の異なる児童が、安全のために、あるいは非常事態が発生したときに機能するための学習や訓練に取り組み、シミュレーションをしていくことで、それぞれの役割を認識し、通学班という単位が共助集団であることを知り、社会性を育むことにもつながる。

低学年の児童等、児童の中には、地図上での理解が難しい子供もいることから、発達段階や理解の状況に応じて、教員の指導や助言を効果的に行うことが必要である。